

いけばなにおける最後の協同作業： 切り花の生と美を明らかにいけ切る

柳川太希

序

現代においていけばなと呼ばれるジャンルは、花を花器に挿して鑑賞する営為である、と一般的には理解されているだろう。また、いけばな以外にも花道（華道）とも呼ばれ、芸道の一つに数え上げられることもある。このいけばなは、語に即せば「はな」を「いける」行為とその所産とを意味する。「はな」は一般に切り花と言われる枝ないし茎を付けたまま切り取った素材を指す。その中でも花が代表的な部位ではあるが、実際は他に葉、茎、枝なども含意する。また、「いける」は「生ける」ないし「活ける」の字が当てられ、制作者であるいけ手の一定の人為性が前提とされている。

従来のいけばな研究は、切り花を花器に挿したときの形（これがいけばなにおいてはしばしば型となる）を考察対象としてきた。しかし、実際のいけばなはそれだけではない。私はこれまで、先行研究が着目してこなかった、植物ないし切り花の命に着目しながら研究を行なっている（2022、2023、2024）。この点に着目すると、いけばなにおけるいけ手の行動の範囲は前後に拡張される。次頁の図表1に即して見ていこう。

まず、いけ手が切り花を花器に挿す前に、野や庭にある植物を切ってくる過程がある。もちろん、現代のいけばなにおいて、いけ手が野や庭にある植物を切ることのできる状況は限られており、花屋等で切り花を入手するのが一般的かもしれないが、花器に挿すべく特定の（切り）花を選ぶ点では同じである。

また、いけ手が野や庭にある植物を切ってきて、それを花器に挿し終えたところで完了するわけではない。一般的に絵画や彫刻の場合、描き終えたときないし彫り終えたときが完成であり、それ以降に手を加えるのは修復ないし修正と呼ばれる。それに対していけばなの場合、いけ手が切り花を花器に挿し終えた時点で一定の形を与えるものの、それ以降もいけ手は切り花の生の変化に即して手を加え続け、単なる状態の保持のみならず新たな展開を企図する。

このように私の研究は、第一のいけ手が野や庭にある植物を切ってくる段階から、第二の切